



青木の風

生きる 創る そして輝く

学校だより 5月号

令和 4年 4月 28日
横浜市立青木小学校

心の扉をノックする

校長 永野 美雄

改めて述べるまでもなく、挨拶はコミュニケーションの基本であり、小学校の間にどの子にも身につけてもらいたい習慣の一つであると考えています。

挨拶の「挨」は押し開く、心を開くという意味があり、「拶」には迫る、相手に近づくという意味があるそうです。挨拶とは、まず自分の心を開いて、相手に近づき、相手の心に優しくアプローチする行為ということになるのでしょうか。

私は1カ月ごとにスロープ門と壁画門に交互に立って、子どもたち一人ひとりに挨拶をするようにしています。元気な挨拶が返ってくる時は私の気持ちも明るくなります。こちらから声を掛けるより先に挨拶をする子も多く、大切なものを身につけているなと思います。中には恥ずかしさから小さな声になってしまう子もいます。「大丈夫だよ」と心で思いながら笑顔で応じます。まれに挨拶が返ってこないときもありますが、私に心を開く力が足りていないなと自省します。

どの子にも気持ちのよい挨拶を返してほしいと思いながら朝の声掛けをしているうちに、ちょっとした工夫を編み出しました。一つはタイミングを計ること。ある程度距離が縮まってくると目と目が合う瞬間が現れます。その時を逃さずに声を掛けると効果があります。もう一つは、声の調子に変化をつけること。生物学者の福岡伸一さんは「生物は変化を刺激として認識する」と言っていました。次々と登校する子に挨拶をするので、私の場合「おはようございます」の連続になるものだから、同じ調子では刺激が薄れてしまい、BGMになり兼ねません。高学年と低学年で声の調子を変えるなど変化をつけるようにしています。さらにもう一つは、最高の笑顔と明るい声で、子どもの心の扉をノックする気持ちで挨拶すること。これが一番大切だと思います。今は顔の半分がマスクで隠れているので、表情はより一層意識しています。「挨拶とは、まず自分の心を開いて、相手に近づき、相手の心に優しく迫ること」。まさにその通りであると思います。

4月に行われた「青木のまちな風」学校運営協議会で、朝、子どもたちの登校を見守っていただいている委員の方から「今年は元気に挨拶する子が多いですよ」とお褒めの言葉をいただきました。朝会ですぐに子どもたちにフィードバックしました。

学校と家庭と地域が一体となって、進んで挨拶ができる子どもたちを育て、街のあちこちで挨拶の花が咲くことを願っています。